

情報システムとOR

大阪ガス株式会社
取締役 情報システム部長

武谷 剛一郎



今から約20年前、企画室の若きスタッフの一員であった私は、当時彗星のように現われた（と私たちには思えた。）ORなるものを吸収すべく、日科技連主催のOR研修に参加した。

今の忙しい時代から思えばよく行けたものだと思うが、週2日、6カ月の長期の研修で、時々、社用でやむをえず欠席しながらも、当時の新進気鋭の大学教授、助教授、若手の企業実務家の熱をおびた講義に聞き入ったものである。

ゲームの理論、待ち行列、LP、DP、など耳新しい学問は、アメリカにおける実例や、日本における導入事例などを引用して比較的わかりやすく講義されたはずであるが、文科系学部を卒業して数学の素養の乏しい私にはよくわからないことも多かった。

それでも、若さと好奇心から、せっかく教わったものを何か社内で役立てようと、在庫管理や、PERT、CPMなどの手法を使って、業務の改善ができないかと生半可の議論をふりまわしてあれこれと考えた。

若い管理者やスタッフが、このアメリカ軍生まれの手法や理論を一生懸命吸収しようと精一杯努力していたように思うが、当時は、これらの理論や手法は、企業内では、利用範囲も使用する人々も限定されていたのではないと思う。

ひるがえって今日はどうだろうか。

大学の工学系はもちろん、文科系でも経営学科などでは、経営工学などとして講座があり、ORは学生の一般的素養とさえなっている。

企業内でも、ORという言葉は、一般には常識語となり、逆に、ORという言葉自身は、日常あまり使われなくなり、耳にすることが少なくなった。

もちろん、リニアプログラミング、PERTなどの手法は独立してごく自然に使われていて、特別にORなどという言葉を使う必要がなくなったのかもしれない。

在庫管理、需要予測、投資決定、建設工程積算などの実務領域では、ORの理論や手法が、個別に自由に使いこなされていて、当然のこととなっているのであろう。

まさに今昔の感である。

— • —

ORは、企業内においては、経営の意思決定のためのツールとして、また課題解決のための分析手法として役立てようというのが大きな目的であったと理解している。

ORの発展はコンピュータの発展と密接に結びついている。私たちがORを学んだ頃は、複雑な事象を解明するのに、なるほどこんな考え方もあったのかと、考え方や方法を知って眼のうろこが落ちる思いが先で、大量のデータを扱っての計算などなかなかできるものではなかったが、今日では大量のデータの処理と複雑な計算を、大型コンピュータが短時間に処理してくれるので、若き研究者や実務家たちが、研究や経営実務にOR手法

を駆使して何度でもシミュレーションを行なっているのは当然のようであり、目新しいことでも何でもない。

ことにコンピュータが大型の時代から、小型化の時代に入り、利用環境がいちじるしく進んできている状況では、経営中枢における戦略的課題から、最先端現場における実務課題まで、ORを中心とする科学的経営管理手法がますます大いに活用されるべき時期であろう。

しかも経済環境は、国際的国内的どちらも不透明な時代といわれている。

不透明を少しでも透明に近づけるためにもコンピュータを駆使した科学的手法の活用が強調されるべきであろう。

— • —

そして、時はまさに高度情報化時代に突入したといわれる。

コンピュータやネットワークなど、ハードウェア技術の発展はまさに日進月歩であって、これらの利用分野も、確実に広がりつつある。

一方、これらのハードウェアを利用しながら、「情報」をいかに早く集め、いかに上手に活用するかが企業の命運を左右する時代とさえなっている。

情報を収集し、解析し、判断して行動に移すまでの時間の短縮が企業経営にとってきわめて重要な命題である。

ここでもコンピュータとネットワークとともに科学的管理手法活用の重要性はますます増大しつつあるのではなからうか。

— • —

企業にとって、ORがさらに活用されてゆくためにはORの各分野の実用例、適用例が多く紹介され、企業側もそれを十分吸収する努力が必要となる。

学界において理論がますます深化され、精緻になってゆくことは重要であるが、われわれ経営の実務にたずさわるものにとっては、その理論のアプリケーションが最大関心事である。

若い研究者や実務家によって、新しい分析理論や管理手法が企業内にとり入れられ、わかりやすい形で適用分野が飛躍的に拡大され、これらによって、情報化時代にふさわしい情報の高度利用がなされる必要があり、その期待が今日ほど大きい時はない。

経営トップやゼネラルスタッフをサポートする経営情報システム構築の必要性が強調されているが、これはまさに「情報」と「情報システム」とORなどの「管理手法」の結合であり、統合である。

ORの側の研究と情報システムの側の研究とがそれぞれに深められ、しかも双方が緊密に結合することの必要性が当然ながら重要だと思う。

— • —

こうして、ORと情報システムの結合が進めば進むほど、適用分野が広がり利用者も多くなり、利便性も増加するが、そこで気がかりなのは、利用する人たちが、ツールが便利になるにしたがって、そのツールのもつロジック、原理、考え方がだんだんにわからなくなりほしくないかということである。

情報システムのソフトウェアでも、汎用パッケージが多く使われるようになるほどその懸念がある。ロジック、構造がブラックボックス化してゆくわけである。

この傾向を正すのに決め手はなかなかないと思うが、要は、このツールをつくる側も利用する側も、それぞれにこれをわかろうとする努力を重ねることが大事なのであろう。